

結 綱 植 物 記 (第三)

牧野富太郎

Plantae Miscellaneae Makinoanae (III).

Tomitarō MAKINO, Dr. Sc.

2604 (1944)

昭和十九年七月二十五日

本田正次博士ニ誨フ

昭和十八年十一月一日ニ京都ニ於ケル植物分類地理學會發行ノ『植物分類、地理』第十三卷ハ京都帝國大學教授小泉源一博士ノ還暦記念號デアルガ、其誌上ニ於テ本田正次博士ガ「科の和名統一に就いて」ト題スル一文ヲ掲ゲ大分拙者ニ向ツテ挑戦セラレテキルノデ、今茲ニ一管ノ筆ヲ執ツテ聊カ應砲スルノ止ムナキニ至ツタ次第ダ

先づ其文中ノ一節ニ『今日偶然一生徒が私に質問して曰く「ウラシマサウはテンナンシャウ科ではないですか。牧野先生の圖鑑にはサトイモ科と書いてありますから。私はこの質問に對して生徒と同様の不審を抱いた。何故ならば先取權の上からテンナンシャウ科が古いか、サトイモ科が古いかは文獻を見た上でなければ俄かに斷定し難いが、今迄我々が使ひ慣れたテンナンシャウ科が消えてサトイモ科が現はれた譯は本當に私には解し難いのである。それで私はその生徒にはテンナンシャウ科で差支ないと答へて置いたが如何なるものであらう。』

ト本田博士ガ書イテキルガ、是レハ假令さといも科トシテモ賢明達識ノ士ナレバ早速ニ成ル程ト合點シテ其邊ノ消息ヲ了解シ何等「解し難い」コトハナイデアラウ、試ニ思ツテ見給へ、元來我日本ニ天南星ト云フ本當ノ植物ガアル乎否乎ヲ、然カシ我邦テ從來其名デ呼ソデキタ植物ガアルニハアツテ拙者モトイ近年マデハ先輩ノ謬見ニキズラレテ其名ヲ使ツテキタノダガ、今日デノ昨非ヲ悟ツテ其天南星ガ我邦ニ產スルト謂フ事實ヲ斷然否定シテキル、故ニ拙者ノ『圖鑑』774 頁第 2320 圖ニ與ヘラレテアルてんなんしゃうノ和名ハ斷乎トシテ之ヲ取消シ別ノ名デ之ヲ呼ブ事ニシテキル、ツマリてんなんしゃうノ和名ト漢名トヲ放逐スルノデアル

我邦ニハ天南星ハ既ニ無イ！乃コデ其科即チ Araceae ノ我邦代表者トシテてんなんしゃうノ後ト釜ニ誰レモガ能ク知ツテキルさといもヲ据エテ其レヲさといも科ト改メタ次第ガ其邊何ノ無理モ何ノ不都合モナカラウヂヤナイ乎、天南星ガ我邦ニ在ルト思惟

スルノハ最早拙者ニハ時世後レノ舊説トシカ感ジナイ、我邦ニ無イ植物ヲ以テ我邦デノ科名ニスルノハ不徹底至極デハナイ乎、訂正ヲセネバナラン所以ダ

我邦從來其和名ヲてんなんしゃうトシ其漢名ヲ天南星トシタ植物ハ學者ニ由テ必ズシモ其種ガ同一ノ者デハナカツタ、故ニ岩崎灌園ノ『本草圖譜』ニ在ル天南星ト、飯沼懲齋ノ『草木圖說』ニ在ル天南星トハ敢テ同種ノ者デハナイノデアル、然カシ支那デ天南星ト云フ植物ハ *Arisaema pentaphyllum* SCHOTT (= *Arum pentaphyllum* L.) ガ正品ノ様ダケレド尙其類品ニ天南星ノ名ヲ冒シテキル者ガ幾種乎アツテ同名異種ノ觀ヲ呈シテキル、ソシテ其中ニ *A. heterophyllum* BLUME ガ入ツテキテ是亦天南星ノ名ヲ冒シテキルガ唯此一種ノミハ我邦ニモ產スル、然カシ其レハ舊クヨリまひづるさうト呼シテキル未ダ曾テ之レヲてんなんしゃうト稱ヘタ事ハナカツタ、然ルニ今日其レヲまひづるてんなんしゃうト謂ツテキルノハ是レハ無論前々カラノ名デハナク其レハズツト後、明治八年發行ノ『新訂草木圖說』デ田中芳男、小野職穀兩氏ガ殊更ニサウシタ第二次的ノ和名デアル、又我邦デハ能ク *A. japonicum* BLUME ヲてんなんしゃう即チ天南星ニ充テキルガ是レ亦全然謬リデアツテ其レハ決シテ天南星デハナイ

上ニ書イタ天南星ノ主品即チ *A. pentaphyllum* (L.) SCHOTT ハ支那ノ特產種デアツテ固ヨリ我日本ニハ產シナイ、其球莖ハ硬質白色デ四分乃至一寸三分許ノ徑ガアル、凹壓セラレタ平圓形デ一般ニ小凹點ヲ周ラン上頂面ニハ其處ニ芽ノ位置ヲ現ハシテキル、其大形ナル球莖ヲ中心トシテ其レカラ小形ノ仔苗ガ分レテキル、其乾燥セル生薑ハ少シノ香ヒト味トヲ有シ之レヲ喰ムト其レガ假令少量デアツテモ非常ニ辛辣デアル、葉ハ五全裝ヲ成シ無柄ノ小葉ハ長橢圓形デ鈍頭ヲ呈スル、肉穗花軸ノ附飾物ハ直立シテ鍼形ヲ呈シ、佛焰苞ハ上部斜向シ長形デ短キ銳尖頭ヲ有スル

又本田博士ハ『前記の外、牧野先生の新しい「日本植物圖鑑」の中には我々に目新しい科の名前が少くない。例へばグチビルバナ科、カラカサバナ科、ジフジバナ科、ホモノ科などで、これらの名は何とも斷つてはないが、恐らく同書で初めて先生が作られたものであらうと忖度する。といふのは同書ではこれも何とも断りなしに新名や新組合などの新しい學名と覺しきものが到る處に散見出来るからである。』

ト書イテキルガ、拙者ノ新名譯名ヲ下シタくちびるばな科、からかさばな科、じふじばな科、ほもの科ハ其命名ニ當ツテ何モ別ニ豫ジメ斷ハル必要ノナイモノデ、是レハ一見シテくちびるばな科ハ脣形科ノ *Labiatae*、からかさばな科ハ繖形科 (=傘形科) ノ *Umbelliferae*、じふじばな科ハ十字科ノ *Cruciferae*、ほもの科ハ禾本科ノ *Graminae* デアル事ガ拙者ノ『日本植物圖鑑』ニハ其「自然分類表」ニチャント明記シテアル、ソシテ此書ノ分類法ハ *A. ENGLER* 氏ノ最新分類式ニ準據スルト斷リ書キシテ是レ亦其由シヲ本書ノ凡例中ニ叙シテアル、若シモ此和譯名ガ不都合ダト言フナナレバ同ジク *ENGLER* 氏分類法中ニ在ル *Labiatae*, *Umbelliferae*, *Cruciferae* 並ニ *Graminae* ノ科名モ亦不都合ダト謂フ結論ニナルガ天下豈ニ其理アラン哉デアル

又新シク出版セラレタ書物ニハ其書中ニ新見、新事ニ在ルノハ當リ前ノ事デ是レアツ

テコソ其書物ニ價値ガアル、ソシテ我が主張ヲ、我が意見ヲ、我が著書ニ載セル事ハ是レハ著者ノ自由、權理デ何モ一々之レヲ他ニ斷ハル必要ハナク又其シナ不見識、不常識ヲ敢テスル人モナカラウ、故ニ拙者ガ植物ニ新名ヲ下スモ、名ノ新組合セヲスルモ、又學名ヲ記スルモ是レ固ヨリ自由勝手デアツテ何ニモ他人ノ顏色ヲ覗ヒ又他ニ顧慮シ又他ノ掣肘ヲ受クル必要ハナク我が思フ存分ニ突進又突進スレバ其レデヨイノダ、本田博士ハ「學名と覺しきものが」ト書イテキルガ其レハ同博士ノ眼ニ「覺しきもの」ト見エル丈ケノ事デアル、ソシテ兎ニ角其書式ハドウアラウトモ此レハ考究シタ上我が意見ヲ書テキルノデアツテ、徒ニ紙上デ僥倖的ニ combi. ナ行フテキルノトハ選ガ異フ

本田博士ハ又『果してさうだとすれば既にヲドリコサウ科とかシソ科とか代表種を使用した合法的の科名が發表されてゐるに拘らず、何故にクチビルバナ科といふ新名を創定されたか甚だ了解に苦しむ所である。』

ト書イテキルガ、是レハ前ニモ述ベタ様ニ拙者ノ『圖鑑』ノ分類式ハ ENGLER 氏ニ則ツタモノデ其分科ノ中ニハ *Labiatae* (譯名くちびるぼな科) ハアレドモ本田博士が合法的ト私稱スルをどりこさう科或ハしそ科ナル *Lamiaceae* ノ科名モナケレバ、亦あぶらな科ナル *Brassicaceae* ノ科名モナク、亦いね科ナル *Poaceae* ノ科名モナク、亦たけ科ナル *Bambusaceae* ノ科名モナイカラ、例へバ政府が法令ヲ出ス様ナ氣分デ是レハ合法的ダカラ其レニ從ハネバナラゾト壯語シテ見タコロデ萬人ノ敬仰スル中心人物ガ言フナラ兎モ角中々其通りニハ行カナイノデアル、學者ニハ色タナ主張モアレバ亦意見モアルカラ之レヲ強制シテサウ輕々ニホイ來タト無條件ニ受ケ取ラス譯ニハ行クマイ、即チ今其一例トシテ本田博士ノ『大綱日本植物分類學』中ノ吾等ノ不賛成ノ者ヲ擧テ見レバ、其レハ同書中ニ縦マニ設ケテアル「たけ科 Fam. *Bambusaceae*」デアル、斯ノ様ニ之レヲ禾本科外ニ獨立サセテアルノハ單ニ其外觀的ノ感ジニ支配セラレタ輕擊タルニ過ギナク、其レハ科學的 (scientific) ニハ決シテ禾本科外ニ別ニ一科ヲ建ツベキ性質ヲ享有シアル者デハ斷ジテナイ、故ニ世界ニ有名ナ分科學書デハたけ類ハ禾本科中ノ一亞科即チ *Bambuseae* トハナツテキテモ、敢テ其レヲ禾本科外ニ獨立サセタ一科トハ爲テキナイ、其レハ尤モ至極ナ事デサウスルノガ固ヨリ合理的デアルカラダ

本田博士ハ『又禾本科がホモノ科になつた所で、穂をもつてゐるのは禾本科だけではあるまい。』

ト書テキルガ、同博士ハ曾テ禾本科植物ヲ専門ニヤラレタ事がアリナガラ之レト密接ナ關係アル「穂」ト云フ者ニ對シテノ知識が頗ル不足シテキルカラ上ノ様ナ「穂をもつてゐるのは禾本科だけではあるまい」ト皮相ナ言葉モ出ルノデアラウ、是レテ觀ルト同博士ハ未だ「穂」ト云フ者ノ本義、定義、即チ其眞意義ヲゴ存ジデナイ事が看取セラレル。

植物自然分科中ニ伍スル一科ノ *Gramineae* ニ對スル譯語ガ禾本科デ是レハ明治五年十月文部省博物局刊行、田中芳男譯、『塙甘度爾列氏植物自然分科表』ニ出テキルガ此禾本科ノ譯語ガほもの科デアル、禾本ヲ和譯シ以テほもの（穂物ノ意）ト稱スルノハ既

ニ先輩ノ使用セシ成語デアツテ其間何等ノ不都合ヲモ交不合理ヲモ感ジナク極穩當ナ者デアル、其レ故拙者ハ異議ナク其レヲ承認シテ我が『牧野日本植物圖鑑』ニ於テ從來ノ禾本科ヲほもの科トシタ、是レハ「禾」ヲほ即チ穗トシ「本」ヲ物即チ輩トシタモノデ、穗ノ出ル同輩植物ヲ統ベタ者デアル

支那ノ權威アル辭書字典ニ據レバ、禾ハ嘉穀ナリトアリ、又穀穂ヲ云フトモアル、又禾ハ穀屬ノ總稱デアルトモアル、即チ是等ガ禾ノ本義デアル、穀ノ實ノ着テキル處ガ穂デアツテ其レハ稈ノ頂ニ秀デテ出テキル果穗ヲ謂ツタ者デアル、故ニ穂ノ字ハ禾扁ニ書テアル、此ノ様ニ元來穗ノ字ハ曾テハ穀屬穀品ニ對シテ出來タ其專用語デアツタノデアル、ソシテ後ニハ一般ノ禾本類ニ通用スル様ニ其意味ガ擴充セラレタ、然ルニ尙其レ許リニ止マラズニ後世更ニ其範圍ヲ一層延長普遍サセテ遂ニハ禾本科類ナラザル者迄ニモ及ボス様ニナリ、乃コデ其穀穂ノ尖ツタ形貌ニ肖テ穂ノ形チヲシタ者、例ヘバ草木ノ花デモ實デモ便宜的ニ之レヲ穂ト呼ビ更ニ進ソデ槍デモ筆デモ同ジク其尖頭ヲ穗ト云ヒ倣ハス様ニナツタノデアルガ、然カシ此等ハ畢竟穂ノ字ノ假用デアリ使用デアリ借用デアリ又流用デアル事ヲ心得テキナケレバナラナイノダ

穂ト謂ヘバ世間一般ノ所謂ホト呼フ者ヲ以テ穂ノ字始マツテ以來何レモ是レモ一切其レデアルト輕々ニ鶴呑ミニスルノハ、是レ其穂ト云フ者ノ本義ト假用トヲ辨マヘザル淺識、未熟ノ人ノ言フ事デ何等拙者ノほもの科ノ譯語ヲ非難攻撃シ得ベキ根據ノアルモノデハアリ得ナイ

世界ノ學界デ前々カラ權威アル幾多ノ書物ニ採用セラレテキテ永ク我邦デモ慣用シ來ツタ *Gramineae* 即チ禾本科ニほもの科ヲ用ウルノハ少シモ惡ルイ事デハナイ

又 *Labiateae* ノ脣形科ヲぐちびるはな科ト和譯シ、*Cruciferae* ノ十字科ヲじぶな科ト和譯シ、*Umbelliferae* ノ繖形科(傘形科)ヲからかさばな科ト和譯シ、*Gramineae* ノ禾本科ヲほもの科ト和譯シタテ何等不合理ナ者デハナク何等不理窟ナ者デモナイ

序デニ云フガ、本田博士ハ『和名も學名と同様に厳密な先取権を適用するの原則であると思ふが』

ト書イテキルガ、拙者ノ觀ル所デハ是レハ科ヤ學名ヤノ問題トハ違ヒ和名ノ複雜ナ性質上カラ推シ考ヘテ其レハ到底困難至極ナ相談タルヲ免カレ得ナイト斷言シ又豫言シ置クノミナラズ翻ツテ念フニ是レハ亦大シタ必要ナ事デハナイトモ信ズル、然カシ萬一之レヲ實行シ得タトスレバ其結果ハ唯混亂粉糾ヲ招クバカリデ敢テ世間ニ對シテモ亦學界ニ對シテモ何等ノ利益モ齎ラサズ實際却テ囂々タル批難攻撃ヲ受クルバカリデ濟マナク遂ニハ學者無用論マデモ擡起スル乎モ知レナイ事ヲ憂ヘル、然カシ盲、虻に怖ぢずニ其レヲヤツテ見ヤウト云フ人ガアツタ植物ニ關スル一切ノ和書并ニ漢籍、即チ換言セバ植物ニ關スル萬卷ノ和漢書ヲ一冊殘ラズ讀破シタ後デナケレバロ巾タク物ガ言ヘナイカラ中々容易ナ業デハナイ、今拙者ノ見渡シ所デハ殘念ナガラ今日充分深イ素養ヲ累ネタ識見ノ高イ學問ノ博イ其適任者が在ルトモ思ハレナイガ若シ幸ニアツタシタラお慰みダ

マダ上ニ述べタ外ニ科名ノ先取權ナドテ言ヒタイ事ガアルニハアルガ、餘リ長クナルカラ其レハ今此處ニ見合ハシテオク事ニシタ、然カシ或ハ復タ折ヲ見テ更ニ述ベル事ガナイデモナイ乎モ知レナイ、乃コデ今回ハ先づ此一文ヲ以テお仕舞ひトスル事ニシタ

蔥酸ノ蔥

化學書、藥物書ノ中ナドニ出テ來ル蔥酸 (*Acidum oxalicum*=*Oxalic acid*) ノ蔥ノ字ハ抑モ何處カラノ出典字カト謂フト、此蔥ハ酸模(即チすいば=Rumex Acetosa L.)ノ一名デアツテ其レハ郭璞ノ注カラ出テ來タ字デアル、ソシテ其郭璞ノ酸模ノ注ハ「羊蹄ニ似テ稍細シ、味酸ニシテ食フベシ、一ニ蔥ト名クル也」(漢文)デアルガ李時珍ノ『本草綱目』ニモ蔥ガ酸模(すいば)ノ一名トシテ錄セラレテアル、然ルニ此ニ不思議ナノハ此蔥ノ字ガ敢テ字典ニ見エテキナイ事デアルガ、是レハ儼然タル漢字デアル事ガ上ノ郭璞ノ注分カル

Acidum oxalicum ハ元來酢漿草(即チかたばみ=*Oxalis corniculatum* L.)カラノ酸ノ意デハアルガ、此酢漿草ニハ折惡シク一字面デアル佳イ文字ガナイノデ、創メテ其譯字ヲ作ツタ學者ガ、同ジ酸味ヲ含ムすいば即チ酸模ノ方カラ幸ニ其一字面ヲ見付ケ出シテ其レヲ拉シ來リ、乃コデ蔥酸ノ字面ヲ作ツタモノデアル

天保六年(1835)=出版ニナツタ宇田川榕菴ノ『植學啓原』卷ノ三ニ「蔥酸加里
縣模、虎杖、秋海棠等」並ニ「蔥酸加爾基大黃等」ト出デ此ノ如ク蔥酸ノ語が見エテキル、ソシテ尙同書ニハ此等「植物所有之鹽類」ハ詳ニ『開物全書』ニ載ストアル、サウスルト其蔥酸ノ語ハ此『開物全書』ニ在ル譯ダ、即チ此『開物全書』ハ同ジク宇田川榕菴ノ著書デアルガ未刊ノ稿本デアル、ソシテ蔥酸ノ語ハ多分此書ニ出テキルノガ最初デ其レハ榕菴ガ工夫創作シタ譯字デアラウト推察スル、上ノ『植學啓原』ヨリモ前ニ世ニ出タ文政二年(1819)發行、宇田川榕齋譯定、同榕菴校集ノ『和蘭藥鏡』(三冊ノミ出版)、并ニ文政十三年即チ天保元年(1830)發行、宇田川榕齋譯述、同榕菴校補ノ『新訂和蘭藥鏡』、又文政五年-八年(1822-25)發行、宇田川榕齋譯述、同榕菴校補ノ『遠西醫方名物考』、天保四年-六年(1833-35)發行ノ同書『補遺』ニハ蔥酸ノ語ハ見エテヰナク、又『厚生新編』ニモ其語ハ出テキナイ、然カシ榕菴ノ『舍密開宗』ニハ蔥酸ノ語ガアル

其レカラズツト後テ慶應二年(1866)=出版ニナツタ坪井信良ノ『新藥百品考』書中ニ蔥酸ノ語が見エ、又明治五年(1872)刊行小林義直ノ『理禮氏藥物學』、同七年(1874)出版伊藤謙ノ『藥品名彙』、明治十一年(1878)出版菅野虎太ノ『羅甸七科学典』ニモ同ジク蔥酸ノ語が載ツテ居リ、此レヨリ以後ノ書物ニハ無論其レガ時々出テキル様ニナツテ今日ニ及ビ遂ニ普通語トナツテキルガ其源流ヲ書イテ見ルト先づ上ノ通リデアル

滿洲ノおほひとりしづか

滿洲ニ產スルひとりしづかハ内地ノ者トハ違ヒ、モット大形デアツテ莖ハ綠色ヲ呈スル、故ニ自分ハ今之レヲおほひとりしづかト新稱スル、ト謂ツテモ其レハ固ヨリ別種ノ者デハナク矢張リひとりしづかノ一變種デ *Planta majora, elatior; caulis viridis;*

folia ampla ノ者デアル、ソシテ自分ハ其學名ヲ *Chloranthus japonicus* SIEB. var. *mandshuricus* (RUPR.) MAKINO (nov. comb.) ト定ムルガ、是レハ *Ch. mandshuricus* RUPR. ト同ジ者デアツテ又 *Ch. japonicus* KOMAROV Fl. Manshur. II. p. 7, non SIEBOLD デモアル、若シモ之レヲ *Tricerandra* ナル屬名ノ者ト置キ換ヘレバ其學名ハ *T. japonica* NAKAI var. *mandshurica* MAKINO トナル

本品ノ產地ガ亦あむ一地方ニモ及シデキルノ事實ハ RUPRECHT × Decas' plantarum *Amurensium* ノ書デ判カル

あふぎゆり

やまゆり (*Lilium auratum* LINDL.) ノ莖ガ著シク帶化シ、其レニ多數ノ花ヲ着クル事ハ往々吾人ノ見受ケル所デアルガ、其レガ花サクト其地下ノ球即チ鱗莖モ根モ其年デ參ツテ仕舞フ、之レヲあふぎゆりト呼ブ事ガ伊藤伊兵衛ノ『地錦抄附錄』卷ノ二ニ圖入リテ出テ居リ「扇子百合 葉はそ長く多くしげり付て柳葉のごとく草立段々すゑほどひらみて扇子をひらくがごとく花赤く中りん數多く咲て鈴のごとく六月さく」ト書テアル、此處ニ「花赤く」トアルノハ或ハ其品ガ紅筋品乎若シクハ赤味ノ勝ツタ者デモアツタノ乎モ知レナ一 *L. auratum* LINDL. monstr. *multiflorum* MAKINO (Caulis fasciatus, *multiflorus*).).

やまゆりノ此ノ如クナツテ花ノ澤山着イタ寫真ヲ、ズツト以前=此『植物研究雑誌』何巻ノ何號カ=出シテオイタ事ガアツタガ其レハ今村繁三君ノ邸内ニ出來タ者デアツタ、二本同ジ様ナモノガ並シテ立チ、其一本ノモノガ百四十ノ花ヲ着ケ、他ノ一本ノモノガ百十二許ノ花ヲ着ケテ盛シ=閉花シ、看ル人ヲシテあつと言ハセタガ、日本產ノ他ノゆりデハ敢テ此ソナ現象ハ見ラレナイ。

きぶねだいわう

きぶねだいわうハ山城貴船ノ溪流=沿フテ生ジテキルノヲ採テ之レヲ研究シ、きぶねだいわう（貴船大黃）ナル新和名ヲ付ケルト同時ニ其新學名ノ *Rumex Andreeanum* MAKINO モ共ニ發表シテ置イタ、其草狀ハ私ノ『牧野日本植物圖鑑』ノ口繪デ見レバ能ク解カル、是レハ獨リ貴船ノ地ノミニ產シテ未ダ曾テ他處ニハ之レヲ見ズ極メテ局限セラレタ生活場ヲ有ツタ者デ、ツマリ貴船ノ特產名物デアルト謂ツテ可イ一ノ稀品デアル。私ハ此頃此きぶねだいわうヲ以テまだいわう即チ *Rumex Daiwo* MAKINO ノ一變種デアルト云フ事ニ私ノ考ヘガ向ツテ動イタ、即チ其翅果ノ緣齒が極メテ著シイノガきぶねだいわうデ、其レガサウ著シカラヌ者ガまだいわうデアルト云フ事ニナル、ソシテ其植物ノ大サ、葉狀、花穗狀、花形、翅果ノ大サト形狀、瘦果ノ大サト形狀、果翅（宿存萼）ノ形質（緣齒ノ顯著不顯著ハ別トシテ）ハ其兩種全然相互一致シテ居リ、又其生育シテキル場處モ環境モ亦同様デアル、從テ其學名ハ宜シク次ノ通り爲スペキ者デアラウト信ズル

Rumex Daiwo (SIEB.) MAKINO var. *Andreeanum* (MAKINO) MAKINO nov. comb.

=*Rumex Andreeanum* MAKINO.

Hub. Prov. YAMASIRO: Kibune (T. MAKINO!).

Nom. Nipp. *Kibune-daiwō, Karasu-no-abura.*

小野蘭山ノ『本草綱目啓蒙』卷ノ十三、大黃ノ條下ニ「陳藏器〔牧野云フ、蘇頌ノ誤リ〕曰土番大黃ト云ハ土大黃ナリ中山溪間ニ多クアリ京師貴布禰方言カラスノアブラ高サ五尺許葉ハ牛蒡葉ニ似タリ長クシテ未尖ラズ花實トモニ羊蹄ニ同ジ根亦相似テ黃色數條簇リ生ズ」トアツテきぶねだいわうガ解説シテアリからすのあぶらノ貴船方言ガ舉ゲラレテキルガ、然ガシ之レヲ支那ニ謂フ土番大黃ニ充ルノハ固ヨリ蘭山ノ誤リデアラネバナラナイ

今土番大黃ニ就テ宋ノ蘇頌ガ大黃條下ニ述ベテキル所ハ「今蜀川河東陝西州郡ニ皆之レアリ、蜀川錦文ノ者ヲ以テ佳トス、其次ギ秦龍ヨリ來ル者之レヲ土番大黃ト謂フ、正月ノ内ニ青葉ヲ生ジ蘿麻ニ似タリ、大ナル者扇ノ如シ、根ハ芋ノ如ク大ナル者ハ盤ノ如シ、長サー三尺、其細根ハ牛蒡ノ如ク小ナル者亦芋ノ如シ、四月ニ黃花ヲ閉ク亦青紅ニシテ蕎麥花ニ似タル者アリ、莖ハ青紫色ニシテ形チ竹ノ如シ、二八月ニ根ヲ采リ黒皮ヲ去リ、切テ横片ト作シ火ニテ乾カス、蜀大黃ハ乃チ堅片ヲ作シ牛舌ノ形ノ如シ、之レヲ牛舌大黃ト謂フ、ニツノ者功用相等シ、江淮ニ出ル者ヲ土大黃ト曰フ、二月ニ花ヲ開キ細實ヲ結ブ」(漢文) デアルガ、此土番大黃ハ蓋シ *Rheum palmatum* L. ヲ指シデキルノデハナカラウ乎、ソシテ又其土大黃ハ或ハ *Rumex* 屬ノ所ル種ヲ謂ツテキル様ニ私ニハ感ジタガ、果セヤ哉李時珍ハ彼ノ『本草綱目』デ此土大黃ハ酸模(即チすいば *Rumex Acetosa* L.) ヲ指シテキルノダト謂ツテキル、シテ見ルト土番大黃ヲ土大黃ト同物トスル蘭山ノ所見ハ明カニ間違ツテキル、世間デハ何ソデモ小野蘭山ノ説ハ正シイ様ニ買ヒ被ツテキルガ然カシ蘭山先生隨分ト澤山ナ誤謬ヲ敢テジテキル事ヲ知テ置カナケレバナラナイ

大樹玄澤、宇田川玄眞譯校トシテ『厚生新編』書中ニ土大黃ヲ以テ *Lapathum aquaticum* SCOP. (= *Rumex aquaticus* L.) ニ充テテアレド、是レハ正シクナイ、宇田川泰齋譯述、同榕菴校補ノ『新訂增補和蘭藥鏡』ニモ同ジク土大黃ヲ「ラバチュム、アクハチキュム」即チ「リュメクス、アクハチキュス」トシテアルノモ中ツテキナイ、伊藤謙ノ『藥品名彙』(明治七年刊行) ニモ *Rumex aquaticus* ヲ土大黃トシテアレド、是レモ誤デアル、ソシテ其レニまるばたいをう振リ假名ガシテアル

土大黃ハ又杜大黃トモ書イテアル